

サッカー選手の目標志向性と指導者・仲間・親による動機づけ雰囲気の関係性
—ユース年代の国内エリート選手を対象として—

松村 綾 (スポーツ学研究科 コーチング分野)

主査：渋谷 俊浩 副査：豊田 則成, 北村 哲 (指導教員)

Relationship between football players' goal orientation and motivational climate
by coaches, teammates, and parents : For elite players of the Japanese youth-age

Ryo Matsumura

キーワード：目標志向性, 動機づけ雰囲気, サッカー競技, ユース年代, エリート

Key word : goal orientation, motivational climate, football, Youth-age, elite

1. 緒言

スポーツ実施者の目標の持ち方 (目標志向性) は, 指導者, 仲間, 親といった環境要因 (動機づけ雰囲気) の影響を受けることが報告されている (伊藤ほか, 2008 ; 伊藤, 2000 ; 磯貝, 2002). 目標志向性において, 熟達志向性 (技術を向上させるための過程を重視) は, 成績志向性 (他者との比較の中で達成を重視) よりも楽しさやフローといった肯定的な感情を得やすく, 自律性の高い動機づけに繋がりがやすいことが明らかにされている (Duda&Ntoumanis, 2003).

プロ選手になることや全国大会での上位入賞といった目標達成に対して, 日々プレッシャーを感じながらプレーしているユース年代の強豪チームに所属するエリート選手は, バーンアウトやドロップアウトによる離脱につながりやすい状況にあると考えられる.

これらのユース年代のエリート選手が, どのような目標志向性を抱き, それに対して, 重要な他者 (指導者・仲間・親) は, 選手にどのような影響を与えているのかについては未だ明らかにされていない.

2. 研究目的

本研究では, ユース年代を対象とした, 国内サッカーの強豪チームに所属するエリート選手の目標志向性と重要な他者 (指導者・仲間・親) による動機づけ雰囲気について, その実態と特徴について探索的に調査し, その選手の目標志向性と重要な他者による動機づけ雰囲気の関係性について検討することを目的とした.

3. 研究方法

1) 対象者

国内サッカーの強豪チームに所属する競技力の高いエリート選手 (1・2 軍に当たる選手 : n=157) を分析対象者とした.

2) 調査項目

アンケート用紙を用いて基本属性の他, 以下の項目について調査を行った.

- (1) 選手の目標志向性 (磯貝, 2001)
- (2) コーチによる動機づけ雰囲気 (藤田・松永, 2009)
- (3) 仲間による動機づけ雰囲気 (藤田・松永, 2009)
- (4) 親による動機づけ雰囲気 (中須賀ほか, 2020)

3) 分析方法

調査結果について, 統計的手法を用いて以下の研究課題について検討した.

- 課題 1) 活動環境間 (学校運動部活動群と J リーグクラブ群) における目標志向性と重要な他者による動機づけ雰囲気の比較
- 課題 2) 選手の目標志向性と重要な他者による動機づけ雰囲気の関係性について

4. 結果と考察

1) 課題 1 について

- (1) J リーグクラブ群 (n=78) は, 運動部活動群 (n=79) に比べて, 熟達志向性が高かった ($p<.05$) (表 1).
- (2) 運動部活動群は, コーチによる動機づけ雰囲気 (「失敗に対する罰」, 「不平等な認識」), 親による動機づけ雰囲気 (「能力-成功雰囲気」) の得点が J リーグクラブ群より有意に高いことから ($p<.05$) (表 1), 指導者の関わり方を否定的に捉え, 親からのプレッシャーを感じていることが示唆された.
- (3) 目標志向性タイプでは, 無志向タイプにおいて運動部活動群が有意に多く ($p<.01$) (表 2), サッカーに対する意欲が低下している傾向にあることが推察された.

2) 課題2について

- (1) Jリーグクラブ群の熟達志向性はコーチの「競争・努力」の影響を受け(図1), 運動部活動群の熟達志向性は, コーチの「協力」, 成績志向性はコーチの「競争・努力」の影響を受けていた(図2, 図3).
- (2) Jリーグクラブ群は, コーチによる「競争・努力」によって熟達志向性が高まるのに対し, 運動部活動群は, コーチによる「競争・努力」によって成績志向性が高まることから, Jリーグクラブ群の環境では, 指導者は競争を熟達的に促していることが伺える. 一方で, 運動部活動群の熟達志向性が有意に低いことを考えると, 同じ働きかけであっても, ローレベル群と運動部活動群にとっては, 成績的な関与として捉えられていることが示唆された.

表1 活動環境間の目標志向性尺度および動機づけ雰囲気尺度の下位因子得点の比較結果

		Jクラブ		部活動	T検定
		N	78	79	p<.05
目標志向性		熟達志向性	M 12.64	11.76	J>部
		SD 1.64	1.90		
		成績志向性	M 20.77	20.04	n.s.
		SD 2.92	3.14		
コーチの 動機づけ雰囲気		失敗に対する罰	M 3.58	4.58	J<部
		SD 1.88	2.07		
		不平等な認識	M 6.56	8.29	J<部
		SD 2.95	3.06		
		協力	M 8.08	8.03	n.s.
		SD 1.44	1.62		
		競争・努力	M 12.72	12.42	n.s.
		SD 1.61	2.32		
仲間 の 動機づけ雰囲気		協力・努力	M 20.58	20.10	n.s.
		SD 2.89	3.24		
		対立	M 9.92	10.15	n.s.
		SD 3.06	3.19		
親 の 動機づけ雰囲気		能力-成功雰囲気	M 9.73	12.06	J<部
		SD 3.78	3.93		
		心配-不安雰囲気	M 8.54	7.99	n.s.
		SD 2.92	2.45		
		学習志向雰囲気	M 12.77	11.76	J>部
		SD 2.01	2.01		

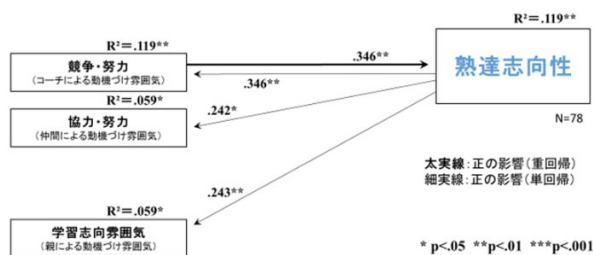


図1 Jリーグクラブチーム群の熟達志向性と重要な他者による動機づけ雰囲気の関係性

表2 活動環境による目標志向性タイプの比較結果

	両志向タイプ		熟達志向タイプ		成績志向タイプ		無志向タイプ	
	n (%)	調整済み残差	n (%)	調整済み残差	n (%)	調整済み残差	n (%)	調整済み残差
Jリーグクラブチーム(N=78)	29(18.5%)	1.785	16(10.2%)	1.808	13(8.3%)	-0.579	20(12.7%)	-2.606
運動部活動(N=79)	19(12.1%)	-1.785	8(5.1%)	-1.808	16(10.2%)	0.579	36(22.9%)	2.606

($\chi^2=0.267$, $df=1$, $p<.001$)

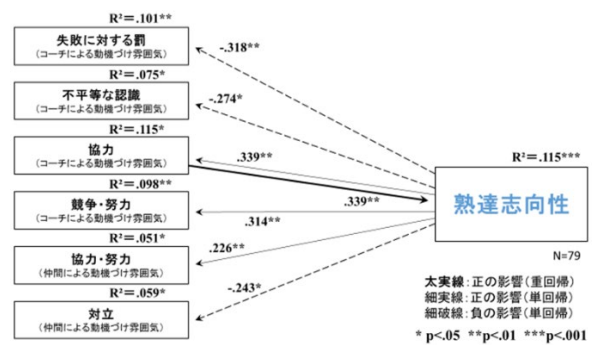


図2 運動部活動群の熟達志向性と重要な他者による動機づけ雰囲気の関係性

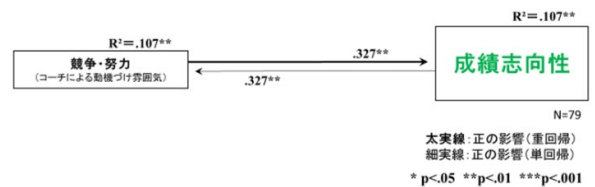


図3 運動部活動群の成績志向性と重要な他者による動機づけ雰囲気の関係性

5. 現場への示唆

コーチによるチーム内競争や努力を重視する働きかけは, 選手の熟達志向性・成績志向性ともに促すことが本研究において明らかとなった. 運動部活動の選手においては, 成績志向性が促進されるため, オフシーズンなど, 時期や場面を限定することも必要だと考えられる.

また, 競争の働きかけについて, 熟達志向性を高めるには, 競争をさせる際に, 自身の課題・弱点, ストロングポイントを見つけられるような工夫やフィードバックを行うことが望ましいと考える.

主な文献

- 磯貝 (2001) スポーツ選手の目標設定と目標志向性. 徳永幹雄編著, 健康と競技のスポーツ心理, 不昧堂出版, pp133-143.
- 藤田・松永 (2009) 運動部活動参加者の心理的欲求に影響するコーチ及びチームメイトの行動. 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, 第19巻: 71-80.